

マレーシア・クチン・ドラゴンボート レガッタ参加報告書

Kuching Dragonboat Regatta 2023

報告者：遠征マネージャー 嶋田和雄

マレーシア・クチンで開催されたドラゴンボートレガッタに参加させていただきましたので報告いたします。

日程：2023年10月26日 移動日・(練習日)
10月27日 ヒート1
10月28日 開会式及び予選
10月29日 準決勝・決勝戦 表彰式レセプション
10月30日 移動日

開催場所；マレーシア連邦サラワク州クチン 州会議事堂前サラワク川
特設会場300mコース 4艇レース

参加チーム数：60チーム

ドバイ、カザフスタン、フィリピン、インドネシア、オーストラリア、カンボジア、タイ、中華人民共和国および香港、ミャンマー、マレーシア各州、日本など国際合同チームとしての参加や1国から複数参加もありました。

カテゴリー：混合、メンズ、ウィメンズ、シニア 各20人及び10人

使用艇：シーガル20人艇（10人漕ぎでも使用）木製

予備事項：10月最終週はマレーシアが英国から解放されマレーシア連邦設立を記念する行事として毎年開催されています。2023年は独立60年を記念する行事として開催されました。

ボルネオ島南部にあるサラワク州はマレーシア自治州としての色合いが濃くマレーシア入国後であっても再び入国審査が行われます。マレーシア在住者も入国手続きが必要です。

レース運営方法（順位決定方法）：

レース日程1日目に各カテゴリーの予選（1回戦）を行い各組（4艇）中1位がシ

ードとして日程3日目の準決勝進出となります。2日目に各カテゴリーの予選レース（2回戦）を行い各レースのタイム上位12位までが準決勝に進みます。予選4レースの1位4組により決勝戦が行われます。

コース状況

スタートはポンツーンの係員が龍尾を掴み発艇合図とともに手を離す方式です。このため舵がポンツーン下部に潜り込んで固定されてしまうため先頭漕手が方向を定める必要があります。ブイは50mごとに設置されています。水質としては上流の熱帯雨林からの土を含むことから各国選手から水が重いとの話が聞かれました。

日本からの参加・戦績及び目的について

琵琶湖で練習を行なっているチームを主体とし「Team Biwa」として参加しました。構成は琵琶湖ドラゴンボートクラブ、龍人、小寺製作所、池の里レイカーズ、GPOです。混合、メンズ、シニアのそれぞれ10人艇の部に参加しましたが予選敗退となりました。シニアについては予選2レースとも1位でしたがヒート1ではコースアウトにより1秒加算、2レース目も1位でしたがタイム上位ならずの結果となりました。

今回の遠征については琵琶湖で練習を行なっているメンバーの技術向上と交流、マスターズ開催に向けたレース運営の調査、そして各国チームとの技術交流と連携づくりも目的としました。

遠征チームメンバーは遠征前に合同練習を行い漕ぎの合わせ以外にもフォームの確認を行いました。遠征終了後も遠征メンバー及び志願者での合同練習を実施し遠征等で取得した技術を各チームに持ち帰っています。この練習会は今後も続ける予定です。

現地レースの合間には他国チームと交流しフォームや練習方法を教えてもらったりしました。この国際交流は今現在も継続しています。送られてきた情報は各メンバーにシェアしています

運営情報の伝達について

大会運営情報は全て whatsapp（日本で使われている Line のようなアジアで一般的）により配信されます。チーム・マネージャーは大会事務局の whatsapp に大会日程前日までにエントリーするよう指示されます。レース日程と結果はその日毎に通知され、日程の時刻変更なども各チームに whatsapp を通じて知らされます。その他、レセプションの開催に関する情報や帰国のためのバス手配なども whatsapp で通知されます。Whatsapp は大会側からの一方的送信となりますが全レース終了後は各マネージャーに送信権が解放され帰国バスの手配や来年度の日程等に関する書き込みが許されるようになります。

選手の移動と宿泊等について

選手の到着と出発に対しては借上バス5台が用意されています。到着については随時バスが待機し、各国選手混載で宿泊会場に向かいます。宿泊会場からレース会場までは徒歩10分程度の距離となっており、ホテルの1棟借りとなっています。各マレージャーにはあらかじめ同伴家族の有無を確認し1棟がりホテル周辺のホテルを手配しています。

選手にはホテルでの朝食と昼の弁当が用意されています。飲料水についても大会事務室をホテル内に設けて各チームに必要な数を取りにきてもらって各自でレース会場まで持って行ってもらっています。

レース会場

選手テントは川岸に連なって設営されています。乗艇場は、その川岸に並行してポンツーンを設置して入場ゲートと退場ゲートを厳格に分離して効率的な配置となっています。

ポンツーンには配艇要員以外にもメンテナンス要員がスタンバイし、艇の破損に備えています。(脚力で椅子を破損する選手が時々居るため)

招集テントには艇の配席を模した状態の椅子が広めのスペースに並べられており、招集員が簡単に選手名簿と本人の照合ができるよう工夫がされています。

退場側にもテントが設けられ報道(ユーチューバーも)によるインタビューができるスペースが用意されています。

会場では地元音楽を中心としたダンスホール・ミュージックが大音量でかけられており、アップがわりにするなどチームを超えて交流ダンスを楽しんでいました。レース前にDJの合図で音楽が止まり各レースが終わると踊り始める光景が随所で見られました。

日本からの遠征メンバーも他国ブースで漕ぎ方の講義を受けたり一緒に踊ったりして退屈する時間のない大会でした。(whatsappによるタイムリーな情報運営のおかげでタイムマネジメントには何ら問題が生まれませんでした)

街中で

ホテルの周りのコンビニエンスストア等店舗では、毎日、どこかのチームが夕食を楽しんでいるのですが、いつの間にか他国チームと交わってしまい、どこの国の人なのかわからない状態で歓談を夜更けまで行なっていました(日本チームも)。また、ショッピングセンターや屋台街などでも他チームと出会うたびに握手や歓談を行いレース会場以外でも和やかな雰囲気でお話を交わしました。帰りの空港での待合でも同様でした。

最初は「英語は・・・」と言っていた人も日本チームの中に居たようですが、全員各自勝手に会話し交友を深めInstagramのアドレス交換等を行なっており、最終日までには「喋れないって言った人居ましたっけ?」という状況でした。

今後について

シニアについてはあと0.0x秒差で準決勝進出を逃していること、他カテゴリーについ

ても他国チームから漕ぎに対するアドバイスを受けていること等から2024年も挑戦するべく合同練習会を実施していきます。また、琵琶湖で練習するチームの技術向上のためにもチームを超えた参加メンバーを増やし、得た技術のフィードバックを実施したいと思います。また、琵琶湖でのマスターズ開催に向けての参考になる事項についても調べていきたいと思っています。

遠征参加者各々が他国の選手や監督と個々に連絡先を交換しており、海外大会や漕ぎのトレンドなどの情報の交換が持続されています。このことから滋賀県で開催される大会情報等の発信も可能となり、今後の競技・交流にも活用できるものと思われます。このような交流は持続していきたいと思っています。